

特集「環境破壊と人類の未来」

Theme: The Destruction of the Environment and the Future of Humankind



対談

環境と人間

日本人の考え方をめぐって

吉良竜夫十 森本健一

湖と人間の暮し

森本 私は現在、世界でも富栄養化が最も進んだ湖の一つである諏訪湖を主な対象として、水域の富栄養化現象の解析を行っております。今回、吉良先生が所長をしていらっしゃる琵琶湖研究所を初めて訪問したわけですが、あの有名な「琵琶湖周航の歌」の作者である小口太



吉良竜夫氏

郎は私と同じ岡谷市出身で、その生家はいまでも諏訪湖のほとりにあります。

この琵琶湖の周辺は近江八景という風光明媚なところであり、いろいろな文化を育んできた場所です。琵琶湖自体も、四百万年から五百万年位の歴史を持つ世界最古の湖の一つで、非常に多くの研究がされてきており、一九八四年には、世界湖沼環境会議が琵琶湖で開催されています。

ところで、閉鎖性水域の典型である湖は単なる水たまりではなく、周辺住民の心を写す鏡のような存在である、と考えられると思うのですが、湖と人間との関わりあいというものについて、先生はどのようにお考えかを、まず初めにお話していただければ、と思うのですが……。

吉良 いろいろな面があると思うのですが、やはり湖というのは海と違って、面積が限られていますから、それほど文明の力を持たなかった頃の人間にとっては、交通に使うにしろ漁業に使うにしろ比較的手ごろに利用できる自然であった、ということが大きな意味をもったと思いますね。

森本 たとえば、かりに、滋賀県に琵琶湖がなかったとしたら、大きく歴史というものが変わっていたということはいえますね。

吉良 それはそうだと思いますね。琵琶湖は日本の古代国家ができた、ちょうどその地域にあるわけですから、琵琶湖がなかったら、随分歴史は変わっていたでしょうね。

森本 同じことは、もし諏訪の地に諏訪湖がなかったら、この間、マスコミをにぎわしたように、織田信長と天下を争った武田信玄のひまわりのひまわりが湖底に沈められているかもしれないという形で、現在の我々に中世のロマンを語り



森本健一氏

かけることもなかった(笑い)、ということからもいえますね。その意味でまさに湖は集水域全体の結果の産物と考えられますね。

吉良 そうです。その決算が湖に出るわけです。

森本 で、その湖周辺の人間の暮しぶりをもたらし結果が、浅い湖では比較的早く出るし、深い湖ではなかなか出にくいということはありますね。そうしますと、琵琶湖の場合はたまたま浅い南湖と深い北湖とから成っているわけです。

栄養段階でいきますと、南湖は富栄養湖、北湖は中栄養湖となりますでしょうか。で、北湖の場合は、中栄養湖でも貧栄養湖に近いか富栄養湖に近いか、どちらになるのでしょうか。

吉良 まあ、何を目安にするかによって判断は違うと思うのですが、生産力でいいますと“中”からもう少し“富”の方へ寄っているのではないか、という感じがしないでもない。しかし単に透明度とか窒素やリンの濃度から見れば中と貧との間ということになるのではないのでしょうか。

自然のシステムと人間

森本 今の湖と人間の関係を一般化して、いよいよ、本論に入りたいと思いますが、人が自然環境と接した場合に、自然をどう捉えるかは同じ対象を見ている場合でも、その人の持つ価値観によってかなり異なってくるように思います。たとえば、同じ木であっても、開発業者の人にとっては邪魔ものになるでしょうし、芸術家は枝振りのような形を見るでしょうし、木こりは幹の太さを見るでしょうし、詩人はそこに神秘性を感じるかもしれません。また、先生の場合は葉面積指数という側面から捉えられる(笑い)というようなことがありますね。また、木は人間にとって有用か無用か、というだけではなく、鳥や虫の生活とか、水や土壌や大気とも密接に繋がっているわけですね。こうした、自然界のすべてのものが互いに繋がっているという観点が環境問題を考えるときに必要であるように思うのですが、先生が言われている、自然システムの生態学的認識、ということについてお聞かせ願えればと思うのですが……。

森本 南湖は水深が四メートル位でしょうか。
吉良 平均で三・五メートル、最大の水深で七・八メートル位もありますね。

森本 そうすると、ちょうど、諏訪湖のような感じですね。

吉良 そうですね。
森本 南湖には無酸素層の出現がよくあるのでしょうか。

吉良 ありません。いたって浅いですから。ただ一カ所だけ人工的に深く掘った窪みがありますが、その底だけは夏は無酸素になります。

森本 諏訪湖の場合は水深六メートルの湖心のところに定期観測点があるのですが、夏になりますと、もちろんあれほどのアオコ(植物プランクトン・藍藻)が出るわけですから、結構、無酸素層が生じてくるわけです。だから、琵琶湖の南湖も静かな日が続いて汚染が進めば無酸素層が出る可能性というのはあるのではないのでしょうか。

吉良 もちろん、それはあるでしょう。そうなってほしくないのですが。



対談中の両氏

吉良 大変大きな問題ですけども、「環境とは何か」

という、環境に対する考え方は、それにコミットした学問、たとえば、地理学や生態学などが生まれてから今日まで、だんだんに変化してきていると思うのですね。最初の頃は、環境は人間や生物と切り離されたもので、一方的に人間や生物に対して影響を及ぼすものとして認識されていたんですね。ところが、そうではなく、その環境を認知する主体がなければ環境の概念は成り立たないということが明らかになり、しかも、主体は一方的に環境から影響を受けるだけではなく、自分自身の活動によって環境をどんどん変えていくものであって、結局、人間や生物である主体と環境との関係は相互作用的なシステムである、という認識が出て来たわけですね。

生態学や人文地理学で同じような認識が生まれて、かつてのような環境決定論が強く批判される時代が来るわけですね。このように、主体と環境との相互作用的な関係が強く意識され始めた頃は、主体が違えば環境も違うんだ、という点がとくに強調されて、たとえば極端な例としてユクスキュルのような人は、一人一人の人間や個々

の生物はみなそれぞれ違う環境を持っているのだと主張したのです。この考え方そのものは、今でも別に間違っているわけではないのですが、今のような地球規模の環境問題が発生する時代になってきますと、それだけでは、環境を考え、扱っていくのに不十分であって、要するに、地球上にある人間や自然をすべて含めた全システムが環境であるという認識にだんだんなってきつつある、と思うのですね。

森本 たとえばラブロックの「地球生命圏」(ガイア)というような主張はいま先生のいわれた認識や考え方に通じるものがあるかと思いますが、あの主張はどのような経緯でなされたのでしょうか。

吉良 彼はもともと化学者で、自然科学者ですから、彼の提唱しているガイアというのは、哲学者が頭の中で到達した概念とはちよつと違うのですね。私は一般向きに書かれた本しか読んでいませんので正確なことは知りませんが、彼がガイアという概念を提出した裏には非常に具体的な、どの微生物がどこどのような働きをしているか、というような話が基礎になっていて、その上に

概念ができています。彼に似た、同じようなホーリズムの

思想は他にもあって、たとえば、今西錦司さんは「生物全体社会」という言葉を使っています。しかし、それらはある意味ではガイアによく対応する概念ではありませんが、ラブロックほど自然科学的な裏付けをもって地球全体が一つの自己調節系であることを主張した人は初めてですね。

森本 で、先生は岩波講座の『転換期における人間』というシリーズの「2 自然とは」の中で、人間の自然に対する認識や影響について、AからDまでの四段階のレベルに大別されていますね。つまり、Aが宇宙空間の自然システム、Bが地球のシステム、Cが生物圏のシステム、Dが地域生態のシステム、というように、スケールの大きなものから小さなものと分けて考えられています。また、自然のシステム、とくに生物の関与するシステムである生態系は、基本的に保守的な性格を持っている、さまざまなフィードバック制御によって、その構造と機能をほぼ一定に維持しようとする性質を持っているというか、一定のバランスをとろうとする性質を有して

いる、とも述べられています。

そこで、このフィードバック制御によって一定の構造と機能を維持しようとする自然のシステムの性質というのは、先生が大別された四つの段階のそれぞれに共通して存在しているのかどうかについて、お聞きしたいと思います。

吉良 あの四つのレベルは、論文の中にも書いておきましたが、必ずしも厳密には、DはCのサブシステムであり、CはBのサブシステムであるというようにはなっていないけれども、全体として大体そういう分け方になっている。大きなシステムがあり、それは幾つものサブシステムに分割可能であって、それらのサブシステムはまたその中が幾つかに分かれる。そしてそれらのサブシステムの各レベルで自然のバランス的な自己調節機能があるということ、これは間違いないと思います。

森本 自然界のバランスを保つ仕組みがいろいろなレベルであるということ承ったわけですが、このことは人間の身体についても単細胞と多細胞との間にあつて、一個の細胞が多細胞とバランスをとって一つの形態を保

つているところにも見られるわけですね。そうしますと、このバランスを保つ仕組みというのは、自然の生きている一つの証しというか、自然にはバランスを保つ力がある、というように考えてもいいのではないか、とも思うのですが……。

吉良 まあ、どちらの側から見るかの問題ですけれども、そういうバランスを保てるようなシステムでなければ長く地球上では存続できない、従ってそういうシステムだけが進化の結果存続してきた、ということになるでしょう。

森本 自然界にいろいろな生物がいます、それらがそれぞれ互いに役割をもって繋がっているわけです。それで、生命の発生においても、マルグリスあたりは共生説を主張していて、鞭毛や葉緑体とかが共生して一つの生命体を作った、と言っていますね。このように、生命そのものを成り立たせているのは、多くの生命の共同体と、いうか役割分担によってであると思うのですが、たとえば、牛のルーメン（反芻胃）なんか栗原康先生の研究からいえば、内容物一あたり十億のバクテリアと百万の原

生動物が含まれている。また、シロアリは、セルロース分解菌とか窒素固定菌とかを持っている、さらには、スプーン一杯の土の中には百億ですか、その位の微生物がいる……。

吉良 微生物のオーダーでしたらそのくらいになるでしょう。

森本 ですから、自然においては、やはり目に見えないところにいろいろな生物がいて機能を發揮しているんだという、そのような捉え方をしたいかなとだめだと思ふのですね。

今日のように衛生観念が発達することによって、たとえば土を完全に滅菌、殺菌するとか、というのでは、いわば自然のシステムから反したことになるのではないかと、と危惧しているのですが……。

吉良 全くその通りなんです、医学というのは人間の命を守るために発達してきて、それがだんだん清潔第一というか、滅菌的医学になってきてしまっている。よく「自然が健康でなければ人間は健康でありえない」などと格好のいいことを言いますが、医学の持っている

滅菌思想と自然の健康さというものは全然逆のものですからね。双方がだんだんぶつかって矛盾をはらんできているような気がするのです。そのうち、今でも人工臓器や凍結卵受精の問題がくすぶっているように、何らかの形で医学の進歩と自然の法則性とが衝突するのではないか、と思うのです。人間が他にやっている工業活動のようなものは初めから自然とものにぶつかっています、医学の面はやや遅れていた。しかし、だんだんそこでも矛盾が起こってきましたね、われわれ人間は思想的な割り切りというか、対決というか、それを迫られているような気がするのです。

この問題は難しく、私にはどこに落ち着くのかよくわからないのですが、いったい人間の欲望というのは何だろうということにきていて、という気がしますね。

森本 どちらかといえば、農業も土を離れて水耕栽培とか農薬を使って植物を育てていくとか、水に関しても戦後アメリカの指示によって塩素消毒をやってきた、それがまたトリハロメタン（有害な有機塩素化合物）のような問題を引き起こしている。また、我々の子供たちも無菌

状態の生活の中にいて、たとえば、食べ物でも、滅菌したものと、火を通したものを食べて育ってくることは可能であっても、では実際に生き残れるのか、といった場合には、やはり下痢などをして抵抗力や免疫力をつけてこそ生き残れるようになると思うのです。今の文明の流れはそのような自然のシステムからはずれ、逆転して、すべて自然を振り伏せていく、というところがあるのではないのでしょうか。

吉良 しかし現実問題としては、その方が平均寿命が延びているわけですよ。人間の願望からすればやはりその方がありがたいわけですし、人間の文明は自然からの脱却を目標にして発達してきたところがありますのでね。

自然との食い違いを言うことはやさしいのですが、では、人間の生き方をもう一度自然流に帰すことができるかという、それは無理ですね。ただし、まだ今の世の中では、今おっしゃったように、子供たちはできるだけ衛生的に育てられたとしても、結局は雑菌が入って来て下痢をしたりして、それに耐えていかなければ生き延び

られない。

だからそういう意味では、今のところは、まだ人間はある程度まで自然の法則の中で暮らさざるを得ません。しかし、どうもそれがだんだん完全に滅菌温室の中で育つようになっていきそうな感じがですね。そこでどうして人間は、ある種の思想的な対決をせざるを得なくなるのではないのでしょうか。

森本 私も学生によく話をするのですが、「蚊帳」って知っているかといえば「知らない」と答える。昔は人間と蚊とが共存(?)していたのだと説明し、いま君たちがハエや蚊を見るとどうするかといえば、すぐ殺虫剤をかけるというのですね。昔の魚屋さんだと、ハエとり紙をおいたり、ハエとりトラップのようなものでハエをとっていた。いま魚屋さんが殺虫剤をまいたら大変なことになるのですが、最近はどうも自分の邪魔になる生物、とくに昆虫などはいやだという人が多いですね。

これなども、自然がどんどんなくなって来た中で育ってきて、しかも塾ばかり行つて勉強だけして自然と触れ合う機会がなくなってきたことによって起こってきてい

ると思うのですね。

この間も、ある新聞社の記者が私を取材した時、虫は大きらいだ、どんな虫もきらいだ、というのですね。

吉良 その記者は、環境問題の担当なのでしょう(笑い)。

森本 このような状態が長く続くと、環境と人間というか、自然と都会の衛生至上主義的生活というか、種の絶滅の問題もそうですが、自然に対する、あるいは生物に対する痛みを覚えないというか、人間だけが生きられればそれでよい、という考え方になってくるように思うわけです。そういう意味で、子供の小さい時にどういう環境で育つかということは大事な問題ですから、我々大人が積極的に自然を残していくという意志を持たないと、これからますます人間と自然との距離が開いていくように思うのです。

「実験動物」としての日本人

吉良 特に日本人は、ある意味で実験動物的な方向を向いているような気がしますね。我々のような考え方を

している人間の目から見ると、同じ先進国でも、日本人より他の国の方がよほど健全ですね。日本人ほど便利なもの、衛生的なものに対する志向が極端ではないからです。

これにはいろいろなこと、たとえば日本人の民族性みたいなものもからんでいるでしょうが、いわば、世界の歴史の中で日本が置かれたポジションと関係していると思うのですがね。いずれにしても、今の日本は少し度が過ぎていて。これは一体、戻るだろうかどうだろうかということなのですが、僕は多分戻るのではないか、と思います。他の国が全部そうであって、日本がそのあとを追っかけている状況でしたら危ないのですけれども、必ずしもそうではないでしょう。ですから、日本は外国からの影響に非常に弱いので、あるところで、この流れが少し修正されるのかなという気はしますが、ただそれには長い時間がかかるだろう。その間に一世代か二世代くらいは、行き過ぎた世代ができるかも知れないな、という気はしますよ。

森本 ある時期から、急に雑草も除草剤を使って除く

ようになってしまつて、最近は雪が降ってくると、融雪剤を使って雪を溶かそうとする。ドイツなんかは融雪剤を使わないで砂利と塩を混ぜて除いている。日本はなんでもそのような感じで、それは楽をしたいということがあるんでしょうし、また便利だからなんでしょうね。

吉良 そう、便利なこと、要するに楽をしたいんですね。

楽をしたいのは人間誰でもそうなのです。ヨーロッパの人々だって便利な生活をしたのは日本人と同じだと思うのです。しかし、彼らにはかなり強いいろいろな形の制約がかかっています。宗教的なものや倫理的なものなど、欲望に無制限に体を投げ出してはまずいという考え方があるのですね。ところが日本には全然ない。あまり何も考えずに便利だ、楽だ、という感じがですね。

森本 近頃、日本の地球環境に対する責任ということ言われていて、原燃料とか食料にしてもどんどん輸入してきて、それをゴミとしてどんどん捨てている。ある人の試算によると、残飯が年間、一千万トンは日本のお米の生産高に相当する量なのです。我々が育つて

きたころはお米一つも無駄にしてはいけないといつて育てられたのですが、わずか数十年の間にこんなにむちゃくちゃなことになってしまった。こういうような国は世界の他にはないですね。とてもこのまま続けられるものではないでしょう。

吉良 それはね、日本の味方をしていうならば、さつき世界の歴史の中で位置、ということを行いましたけれども、一種の偶然みたいなものがあつて、ある程度やむを得ない事情もあると思うのです。

数十年の間、と今言われたけれど、僕の子供の頃の生活を考えると、わずか六十年や七十年の間に、こんなに生活が変わつていいものかと思うくらい、変わったわけですよ。たとえば今中国に旅行しますとね、便所はきたないし街はきたないし、何たることだと思えます。しかし、ちょっと考えてみると、公衆便所が臭わなくなったのは、日本でもほんのここ二十年か二十五年くらいのことです。それまでは公衆便所は汚いものと決まつていて、東京都内でも、入ればすごい臭いだった。それがなくなったのは、まだついこの間のことなのです。ところが、

今は中国の便所の臭いがつらくて、もう我慢ができなくなっていますね。そのくらい急に変わったのです。

我々が不便、非衛生、貧困というものから抜け出したのは本当に新しいのです。ところがね、西欧の国々は違います。ヨーロッパが産業革命をやつて生活程度がどんなあがつていった頃は、日本の方がヨーロッパに較べてよほど清潔だった。ところが、向こうは急激に変わつていった。その時にヨーロッパは植民地を持つていたわけです。植民地から吸い上げることによって、自国に富を蓄積し、産業革命の成果と合わせてどんどん生活レベルを上げることができた。ですから、たとえば、便所の臭気から逃れたのは我々に比べて古いわけです。まあ、便所をひとつの例にとればですね。

そこで彼らは相当いい生活をし、生活のゆとりができた結果、たとえば自然を大切にしようとか、やたらに環境を損なつてはいけないなどという意識が我々日本人に比べて少なくとも五十年くらいは早く育ち、その意識を充分に蓄積することができた。だから、あまり無茶をしないわけですよ。

ところが日本ははるかに遅く近代化の舞台に出てきて、我々がめつたやたらに働いたおかげで、一挙に生活程度を上げてしまった。しかもヨーロッパの場合よりはるかに技術的に進んだ便利さをいきなり享受することになってしまった。日本人にとって、ついこの間までは、自然というものは不便のシンボルというか、人間に脅威を与える恐ろしい存在であつたわけです。その自然から脱出したかしないうちに、一挙に高度な技術を使った便利な生活に突入した。だから、ヨーロッパ人のようにかなり長い期間、高いレベルの生活が続いて、衣食足つて礼節を知る”という期間が日本にはほとんどなかった。だからこういうひどいことになっていると思うのですね。まあ、日本人そのものにかなり軽佻浮薄なところがあることも否定できませんけれども……。

だから、ひいきめで見れば、我々がこんな生活をしていることにもそれなりの理由はあると思うのですよ。しかし、だからそれがいいということにはならない。こんな無茶な生活が続くはずはないと思うし、必ず反省があるだろうし、世界中から叩かれるなど、いろんなこと

があつて、だんだん改まつてはいくでしょうが、たとえば環境意識とか人権の問題とか民主的なものの考え方とか、ヨーロッパの人並みに日本人に定着するためには、やはり相当な年数がかかるだろうと思うのです。人間の考え方というのも、技術とちがつてそう簡単には進歩しないものですからね。かなりの世代の積み重ねが必要で、やはり向こうに追いつくのに一世代や二世代くらいはかかるだろう。その間に、我々の国土は目の前でめちやくちやになつていくし、子供たちは虫は嫌い、朝シャンをしないと気がすまない、というような世代が一代、二代続く。それをどうするか、というのが問題ですね。

森本 自然界のシステムでいくと、ゴミというものは存在せず、排泄物・死骸等はすべて分解されて元素循環で利用されていく、というのが自然の長い間かけてきた一つの知恵ですね。ところが人間の場合は、ゴミを出しても清潔にするために、廃物屋さんがいて分解するわけですが、その廃物屋さんがそれでまた生計を立てているので、これにはお金がかかるわけです。また、リサイクルということが非常に注目を浴びたり、あるいはかつて

の塵紙交換業が採算が合わないからといって廃業したり、というような問題があるかと思っています。これなどは自然の循環システムというものを、お金という尺度だけで考えているために、うまくいかないところがある。

結局、日本のような資源小国であるにもかかわらず、ゴミの量がすごく多い、という両極端な結果になっているのですね。これを、自分の国は資源小国だから、よそから輸入して持ってきたものは徹底して使い、そしてゴミとしては出さない、という観点を持ったときに日本というのは素晴らしい国になると思いますが、それができるはずなのにむしろ逆のほうに行ってしまったているのですね。

吉良 それはやはり、便利さというのにはなかなか抵抗できませんからね。

森本 お年寄りの世代、私のところにも、母がいるのですが、非常にものを大事に蓄えます。紙一枚でもですね。我々はコンピューターで紙を使って失敗するとすぐ破ってしまう……。

吉良 私も年寄り夫婦で暮しているのですが、とくに

のバルブ用森林に相当するということです。この一年間に使う木材の三分の一が紙に使われている、ということですから、その量の大きさはおそろべきものがありますね。

建築用木材はある意味で耐用年数という形でストックの部分もあると思うのです。しかし、紙としてただ捨てられて燃やされたり、ということになりますと、ペーパーの使用量がますます増えていく。これは将来、森林破壊の問題だけでなく、土壌浸食とか大気や水の大循環にも悪影響が出て重大な結果になると思いますね。

吉良 ともかくコンピューターとワープロとコピー機の三つだけで紙の消費量は一挙に何倍かになったでしょうからね。これはみんな便利なのです。だからコピーしなくてもよいものまでコピーする。

森本 後で読もうと思ってコピーをとって安心してしまい、結局読まなかったりする。会社でも文書を一人一部ずつ渡していくというように。昔は回覧ですんだものですがね、今は一部ずつ必ず持つということも大きいのではないのでしょうか。

ちょうど一人前になったのがまさに戦争中という世代ですから、ものを大切にすることというのはしみこんでいるんですがね。困ったことに、それでは現代の生活はできない。わが家に流れ込んで来る紙だけでもどうしようもない。不用の紙をまとめて集めていますけれど、それがリサイクルのルートに流れてくれればいいんですが、流れないですね、実際は……。新聞紙くらいは喜んで持っていてくれますけれども、それ以外の紙はたまっても持っていてくれない。本当に暮しにくいですよ。

森本 「だから捨て方というのを学ばなければならぬ」といった暮らし方は、やはり自然に対する冒瀆だと思うんですね。あるデータで見ると、紙の問題なんか今ゴミの中ではかなりウエイトを占めています。それが嵩としてゴミの処分の問題になっているということもあるでしょう。日本では一人一年で二百ポンドの紙を使っているのですが、これを木材に直すと十五ポンドの直径で二ポンドの材木十六本に相当する、ということなのです。

そして、日本全体では一年間に百八十億本にあたる木材を使っており、これは三重県ぐらいの広さの六〇万ポンド

一人一人の意識変革の重要性

吉良 どうしたら、それをよりましな形に直していけるか。どこかの国のように、独裁者同然の人がいてその人が言えばそれが法律になるというような、そういうシステムであればとっと早いのですがね。もともと、タバコの吸殻やゴミを捨ててはいけないとかそういうことならやれるでしょうが、経済機構がからんでいる問題はどんなに強力な独裁者がいてもなかなかできないでしょうね。

森本 たとえば、新聞の折り込みチラシなどの規制は可能だと思っていますが、ドイツの街角の看板の場合、町並みの景観との関連で規制があるようですから、新聞のちらしを規制したところで大したことはないとは思いますが、とにかくものすごい量ですね。その中には見るものもあるし見ないものもある、裏が使えらるなら子供たちが絵を書くこともできるのですが、裏表びつしり印刷されていますからね。そしてただゴミとなる。

吉良 私のところは、滋賀県という土地柄もあるので

すが、入ってくる折り込み広告の半分くらいは建売住宅や分譲住宅の広告なんです。だから既に家を持っている人は全く見ないわけです。結局のところは、強制力をどれだけ使えるかという問題で、たとえばフロントみたいなものでしたら比較的、法的規制ができるかもしれません。紙や石油のようにより一般的な消費財は法律的な規制にはなかなかなじまない。とすると、まどろっこしい話ですが、少しずつ一人一人の人の意識の変革が積み重なっていくようにするしかない、と思いますね。

森本 たとえば、主婦などの婦人層を中心にいろんな環境問題の取り組みのなかで、水の問題でいえば厨房から気をつけましょうと。また、ゴミについても神経を使っているコストも考えて、ある業者に集団でひととてもらうとか、というような動きもあるようですが、やはり、一人が自覚をもって仲間を集めてこれを拡大していくということが大切であると思いますね。ですからこういう人がどういうことを感じていくかということが一つの大きい鍵になる、と思うのですね。「私一人くらいならいいでしょう」と思うか「私は頑張る」と思うか、こ

ティックも一緒に燃やせる新しい焼却炉ができて、分別収集がなくなってしまうのです。

良い習慣だと私は思ったのですがね。ただし、現実には相当ひどい人達もいました。きまりを全く無視して何もかも全部一緒に袋に突っ込んで出す。だから名前を書け、ということになるんですよ。カラスが横行していて、ゴミ袋を破るでしょう。するとすぐばれるんですよ。

森本 犬や猫がきてひっかきまわすこともありますからね。

吉良 私のところはいわゆる住宅地域ですから、そんなに全体のレベルが低いところだとは思わないのですがね。現実にはかなりひどいものです。

森本 これはやはり、日本が狭いということもありますけど、資源をたくさん使うわりにはストックしないところがありますね。たとえば家具一つにしても、よく言われるように欧米では、造り付けというか、何代も使っていく。ところが日本では、新しいものを買えば古いものはゴミとして出してしまう、それも、自分のところで作って自分が捨てるならともかく、よそからある意味で

の辺が大きな分岐点になるかと思うのですけれど……。

吉良 やはり無力感というものがありませんから。自分二人がいくら頑張っても、いかにそれが小さいことであるか、ということを感じざるをえないからですね。そういう人に意欲を失わせないような、システムが必要なのではないでしょうか。

森本 ゴミの例で面白いのがありまして、長野県ではとくにゴミの問題に関して、各自自治体のノウ・ハウがあるようで、たとえば厳しく分別させ紙袋には必ず名前を書いて出す、というような……。もちろん、これを都会で行えば、プライバシー問題にひっかかってとんでもないことになる。

吉良 私が大阪に来た時もそうでしたよ。ゴミの紙袋に名前を書いてください、と聞いてびっくりした。余り守られもしなかったし、反対も多かったのですが、ただ、大津市の焼却炉があまりよくなかったために、プラスチックと紙とその他の不燃物とを、いわゆる分別収集するという良い習慣はあったのです。ところが、せっかく良い習慣がついていたにもかかわらず、この間、プラス

収奪というか生活レベルが違ふところから安く買ってきたものを、安いものだからといって、どんどん捨ててしまふ。高いものなら大事にするのでしょうか……。こんなものがはたしてゴミなのかと思うものでも捨てられています。

『モースの見た日本』という本の中で、日本の江戸の名残を留める明治初期の頃の話が出てきますが、今と全然違うなと思うんです。たとえば日本人はとても正直である、と言っている。「鍵一つかけない、三千万人の国民の家に錠も鍵もかける戸さえもない事実であり、昼間はすべて衝立が唯一のドアであるが、それも十才の子供でもいつでも引くことが出来る、或いは穴をあけることが出来る、貧しい人々も礼儀正しく思いやりを持つ、驚いたことにまた残念ながら、我が国で人道の名のもとに道徳教育の重荷になっている善行や品性を日本人は生まれるがらに持っているらしい、簡素な衣服、整頓された家、清潔な環境、自然及び全ての自然物に対する愛、簡素で魅力的な芸術、礼儀正しい態度、他人の気持ちに対する思慮、これらは恵まれた階層の人々だけではなくも

「とも一般的な日本人の特質である」と言っていますし、他に日本人はきれいな好きであるとか、日本人ほど自然を愛する国民はいない(笑い)、などの事例を掲げて非常に日本人をほめている、その同じ日本人が世界でもっとも反対の方向へ行ってしまった。西欧に追いつき追い越せで、日本の足元を見ないで来てしまった感じがしますね。

ヨーロッパの近代化と環境意識

吉良 清潔というと、日本の特性のようなものですが、ヨーロッパでも、中世には、かなり、同じようなことがあったのではないのでしょうか。ヨーロッパ中世では、宗教が非常に強い力を持っていたのに対して、日本の場合には封建制度のもとで身分制度が大きな力を持っていたから意味は違いますが、ともにそこから与えられた他律的な力で個人の行動が規制されていた。それで一応の生活の安定が得られていたので、清潔という特性も培われた。つまり、かなりの部分が抑圧ででき上がっていた美德なんですね。それがヨーロッパでは、ある時期になるとはずれて、町の通りは全部ゴミで埋まっているので、

石畳を敷かなければ馬車も人も通ることができなかったという段階を一度通ってですね、それから先ほど言いましてように、豊かなヨーロッパという時代になって一段階上のところへ到達した。つまり一度地獄を通過した上で、一つ上へ進むことができたわけですね。

日本は今、いわばその地獄の段階にあると思うんです。ただ、時代が違うので、今のようないずれ方をしていただけであって、文化の発達段階としては、日本はまだヨーロッパの産業革命が始まった頃のような状態に近いところにいるんですね。しんどいですよ、これをもう一段階上へ持ち上げるのは……。しかし、持ち上げないと困るわけです。

滋賀県は、ついこのあいだまでは自然がたくさん残っていて、田園風景の本当にきれいなところでした。それが今めちゃくちゃに壊れつつある。悲しいと思いますけどね。そのように自然の破壊をやっているのはどのような人達かというと、必ずしも、よそからやってきた大資本とは限らないんです。土地の人達自身もやっているのです。田舎だといっても今や町と余り生活は変わらない。

滋賀県はお金持ちの県で、各家庭の平均収入は高いですね。だけど、その人達には、自分たちは田舎にいて町とは違う不便な生活を強いられてきたのだ、だから何が何でも都市的にならなければならない、という感覚がしみ込んでいます。それほど、日本人はまだ過去の貧困に近いんですよ。その中でどうしたらこの生活を変えてもつとまじな日本にすることができか、本当に難しいと思うのです。教育の力は大きいと思いますが、少しづつ若い世代から考え方を変えていくほかはない、というのが私の今の結論です。

森本 やはり、さきほど話の出た環境を見る目というのは、自分の木だから切ってしまうといい、とか自分のところだから何をしてもいい、とかいうのが民主主義だとか個人の権利であるというのではなくて、自分が木を切ったことがやはり鳥の住処が失われていくということであるというような認識がないし、余り知られていないのです。

そのようなことから、我々はたとえばどういこうところで教育されてきたかといえば、私が覚えてる範囲で

は、中学では理科の第二分野とか高校では生物になるんです。ところが受験の対象からはずされていて、その勉強はしてこない、ということになる。ですから、自然を見るのは自分にとって利用できるものしか見ないし、その結果も考えない、ということになるのです。

吉良 それから、まず自然の美しさの認識というものがありません。たとえば、田舎の家の前に雑木林があって、新緑の時などは本当に美しい。だけど、そこに住んでいる人でそのように思う人はあまりない。それは落ち葉を落とす厄介ものではあっても、ああ、きれいだな、と思う対象ではない場合が多いですね。だから、何か口実ができて木を切る時には、何の罪悪感もない。自分の庭にかなり大きくなった木があるような場合でも、しばしばそうなるのです。実に簡単に切ってしまう。親かもつと前の代から育ってきて大きな木になっているものを、単に落ち葉の掃除がめんどろだとか、ちょっと突き出した枝が邪魔になるとか、そういうことで簡単に切ってしまう。

そのままの自然の美しさというものを認識しないです

ね。ところが植木屋さんが入って手入れした松などは切らない。また、せっかく琵琶湖の岸に本当にきれいなヤナギ林があつて、その下では春はノウルシなどという花が美しく咲く。それを実に惜しげもなく切つて、その後、普通の庭木や花ショウブなどを植える。少し水位が高くなると水がつかる場所ですから、普通の水を植えてもろくに育たないことは初めから分かっているはずなのですけれども、お金をかけて植えた植物にはねうちがあるけれども、もたら独りでに生えているものにはねうちを認めない。ねうちを決めているのは、客観的な美しさではなくて、一種の経済的なものですね。

ただ、そういう人達を責めることはできない、と思うんですよ。われわれは、ついこの間までは、いわば、自然に押しつぶされたような生活をしてた。それがようやく自然から抜け出せたと思つてゐる。そういう人々も、いつかは、なくなった自然是本当に美しいものだったのだということに気付いて、自然の価値を見直すようになつてくると思ふのですが……。

森本 何か西ドイツなどでは、ゴルフ場を造成する場

合、たとえば一〇鈴の木を切ったら、二〇鈴の木を植える、ということらしいですね。これは法律なのか経験なのかよくわからないところがありますが……。

吉良 そう、私の知つてゐるドイツの例で、それが法律なのかどうかよくわからないのですが、こういうのがあります。町の郊外でかつては果樹園であつたところが分譲地になつて家を建てたんですが、もとの果樹園のリンゴの木がちょうど新築の家の庭の真ん中に残つていて、木の格好は悪いし大変邪魔になる。ところが、直径十センチ以上の木を切るには、市役所の許可がいる。なかなか許可が出ないで困つた、といひますね。そういうことは、多分法律ではないと思ふんですが、そのような制約はドイツというところは特に強いのではないのでしょうか。それから、隣近所からの制約も大きいそうですね。

日本人の女性でドイツ人と結婚してドイツに住んでゐる人なんですが、ご主人も奥さんもそれぞれ忙しい仕事を持つていて、世界を走り回つてゐる。二人そろつて家にいないことが多いので、どうしても庭に雑草が生えてくる。それに対して回りからうるさく言われるそうです。

それで、どちらかが家に帰つてくると、家に居る間は、それこそ必死になつて庭の草取りをすることになるそうです。ドイツのそういうところは大変面白かつたのですが、コミュニティからの制約みたいなものが結構強い。かつての日本も、たとえばモースの書いてゐるような時代には、隣近所の手前だけでも、清潔にして住まなければならなかつたわけですね。しかしヨーロッパは近代化の過程で、そういう段階からはかなり早く抜け出たはずだと思ふのですよ。

森本 いわゆる、個の確立、という意味ですね。

吉良 そう。ところがそれにもかかわらず行つて見ますと、町並みをそろえることに關しても、一軒だけ飛び出すわけにはいかないうような歯止めがかかつてゐるところが多いのです。

森本 それは公德心によるものなのでしょうが。

吉良 よくわからないのです。一度、コミュニティの制約が壊れて個が確立して、その上で出来た公衆道徳のようなものなのか、それとも、昔の伝統をある程度保存してゐるのか。多分私は、昔のものが残つてゐるのだと

思ひますがね。日本のように後進国として、遅れて個を確立したり、便利な生活に移つていくところほど、社会的にもドラステックな変化が起こつてゐるのではないかと、思ふのですがね。だから、日本よりも一つ後に出てきたアジアの新興工業国では、一層ひどくなるのではないかと心配です。

森本 日本よりもっと小さい国が多いですからね。

吉良 ええ、環境問題なども日本がかつて経験したよりもっとひどいのを経験するのではないかと、という気がしますね。生活全体がいわゆる欧米文明で画一化していくにつれてね。それがいいことかどうかの議論は別にして、世界全体がそうなつてゐますからね。東ヨーロッパが軒並みに西欧化していくという時代になってきましたから、それがますます進行していく。

森本 東ヨーロッパが倒れてゐた一つの理由として物が無い、ということですね。ですから、大量に物を作つていく社会をみんな目指してゐる、ということですね。

吉良 そうです。大量に作り、大量に消費することをみんな目指してゐる。それが、いわゆる個の確立した民

主義社会とセットになっています。それ自体が地球を破壊させるかもしれないという話は別としまして……。

環境保全とエコ・テクノロジ

森本 そうしますと、一人一人の責任がものすごく大きくなりますね。さきほども言われましたように、一人がものを大事にするか粗末に考えてとんだん使っていくかの違いが、全体を大きく変えていくことになりますからね。

吉良 そういう点では明らかに、欧米の方が進んでいます。社会の中のかんりの人達が高い環境意識を持っていて、その意識に基づいて行動もするし、新しい技術の開発もするという段階まで来ています。まあ、それが日本にとっては一種の救いでして、かなり早くその影響が「外力」としてやって来ることをある程度期待せざるを得ません。後に続いてくる国々のことを考えると、日本がこのあたりで頑張らないといけないと思いますね。

森本 やはり、環境に対しては単に経済の観点ではなくて、環境に接する哲学といえますか、たとえばマング

は行かないのでしょうかね。

吉良 個の確立、なんて格好のいいことをいいますけれども、実際は大多数の人間は社会全体の流れに強く影響されながら動いているわけで、流れが人々を環境保全に向けて動き出させることに成功すれば、案外早いのではないかと、とも思うんですがね。本当は企業がそれをやれば一番いいのですが、日本はまだだめなので……。

森本 そうですね。日本は減びても企業は減びない、といわれるくらいですからね。収益をあげるために法的規制のゆるい海外に出ていって現地法人を作るくらいです……。

吉良 このごろ、若い人でもね、外食する時に、ポケットから自分の箸を出す人がいますよ。なかなか格好がいい。しかし、割り箸を全部やめることはありません。たとえば日本の杉の間伐材を使えば、コストは高くなるけれど、量は十分にあつて、今は全部捨てているものですから、資源の有効利用になる。「エコ・割り箸」(笑い)を誰かが作って、それが格好いいとなればたちまち右へならえすると思うのです。

ローブとエビもちょうど同じ問題に直面しておりますね。日本においては昔はエビは高級で庶民の手に届かなかったものでしたのが、今や食傷気味なくらいどんどん安く大量に輸入している。それが実はマングローブの破壊の上に成り立っている。これは「エビと日本人」(岩波新書)の中にも書かれているわけですが、原産地の子供が手を真つ赤にして小さいエビを集めてきて、それを売って家庭の経済を支えている、我々日本人は買いまくって食傷気味になっている。そして目先だけで何も考えず、そこにあれば買うし、安ければ買う、という中で、象徴的な話が環境保全型商品についてはドイツはエンゼル・マークというのがついていて、日本でもエコ・マークがついていますが、多少高くても環境を破壊しないものを買う、という人がドイツではだんだん増えている。

やはり、これはこういうことであるからこうなのだ、という環境問題に対する原因・結果の認識が成り立つと、そのような製品を開発して売れる素地がでかと思ふのですが、とにかく、安くて珍奇なものを買ひ漁る、というような段階を経ないと、今いったようなところに

今、日本は世界から袋叩きにあっていますから、そういうことをすればいいのですが、なかなか企業はそれをやらない。日本で今それができる立場にあるのは案外役所なんですけどね。あまりパツとしないイベントばかりやって税金の無駄使いをせずに、他にもやるべきことはあると思うのですがね。

森本 いい意味の補助金を出して環境を守るように動いていけばいいのですが、河川工事についても、ある住民が自然護岸工法でやってほしいと言うと、いやコンクリートの方がいい、と役人の方が言ってみたりしている。

吉良 それこそ法律で決まっていますので、やっかいなことではあるのですよ。それと、自然派の一番の泣きどころは、川に出てくる水の変動幅がヨーロッパと日本では一桁違うことだと思います。日本は十倍大きいでしょう。日本では、全国どこでも一日に一〇〇ミ以上の集中豪雨が降りうるわけです。ヨーロッパではまずありませんからね、そんなことは……。だからヨーロッパだつたら、川岸にヤナギを突き刺しておくような自然工法でも護岸ができるかもしれませんが、日本ではむずかしい。

建設省の人たちは護岸の強度ばかり考える。洪水が起きたときに、少し岸が削られたら、それは個人の財産を侵害するわけですよ、日本の場合は。河川敷の敷地が狭いですからね、建設省にとってはそのことが最も怖い。国が補償しなければならぬ。

一方、自然工法をやかましく言う人たちは基礎的な知識がないので、一日二〇〇ミリの雨が降っても、これで大丈夫ですよ、とは言えない。双方で対立しているものから、上手に知恵を出し合って、その真ん中を探すということができないのですね。

森本 先生はエコ・テクノロジーについても書かれています、これは自然の生態系を生かした技術、ということであると思います。その河川の例で言えば、森の保水性ですか、そうした形のもので、水を早く流すのではなく、たつぷりゆっくり時間をかけて流すとか、エコ・テクノロジーとはどのように応用していけばよいかとお考えですか。

吉良 エコ・テクノロジーというのはもう少し範囲を広げてもいい、と思います。自然そのものを利用するこ

とから始まって、たとえば自分の家の庭にトレンチを掘

って家庭排水を土壌処理するとか、それから日本では土地がなくてできないでしょうが、湖に入ってくる水を全部一度大きな遊水池に溜めておいて浄化する、という方法がありますね、その程度のスケールのもので含めてかなり幅広く考えていいと思うのです。ただし私は、エコ・テクノロジー万能とは思ってはいません。エコ・テクノロジーによって、大都市とか大工場地帯とかいうものまで受けられると思ったら大きな間違いです。それは下水道などの大規模技術でしか受けられないですよ。そういう大規模技術と、いろいろなレベルでの小規模のエコ・テクノロジーとをいかに上手に共存させるか、というところに課題があると思います。

森本 つまり、水たまりの生態系からだんだん宇宙に繋がっていくように、それぞれそれぞれのレベルにあった技術、それらが集まって一つの大きなまとまりへとものたしていく、ということですね。だから、先ほどの便所の話ではないですが、水洗便所にしてそれさえもわざわざ下水処理場に持ってくる。そうすると、下水処理場

距離で最小限度でとにかく処理する以外に方法はないのですね。

大都市問題と人間の未来について

森本 大都市はこれから開発途上国を中心に世界的にかなりの勢いで増えてくる、という話がありますね。

吉良 先進国の方は、都市の成長はかえって止まりましたからね。今後も、都市への人口集積は進んでいくでしょうが、先進国はそれなりにちゃんとした技術でそれを受けていくと思いますので、余り心配はないのですが、一千万都市が途上国のあっちこっちにできそうな勢いでしょう。そんなところにはもちろん下水道はありませんね。

森本 そうですね。スラムができて、農村が荒廃するから大都市に出てくる。飲み水がない。ゴミの問題がある。西暦二〇〇〇年になりますと、ベスト十五ある大都市のうち、十三が開発途上国にあつて、サンパウロは二千万人、リオ・デジャネイロは三千万人の人口になると言いますね。

はブラック・ボックスになってまして、工場からの重金属も危険物も入る、家庭のものも入る、ある意味で昔では有用であったものをも入れてしまつて、ごちゃごちゃにしている。まさにエコ・テクノロジーの発想からいくと、これは大きな欠陥を持っているように思いますね。

吉良 全くその通りですけども、その前に人間は大都市というものを作ってしまった。いま言われた中で、工場排水は各工場がちゃんとやるのが当たり前ですね。これはまだまだ技術的に改良しうる可能性はあるでしょう。しかし、その他のいろいろな排水を分別処理するということは、人口密度の高い、何百万という人が住んでいるような大都市に対しては、ほとんど不可能だ。それは下水道以外に方法はないと思うのですね。

大都市というのはものすごいものです。大都市の一畝が生産している紙屑の量を考えてみてください。一畝の森林の下へ一年間に降ってくる落ち葉、枯れ枝などの量と比べたら、一桁違うわけですよ。ですから、そんなものを先に作ってしまった以上は、それを完全に分解することが可能になれば別ですが、ゴミでも排水でも最短

吉良 そうですか。三千万人ですか。

森本 人類の未来はそういう意味からすると、大変な問題がありますね。やはり、広い国土があるわけですから適正規模で配置してうまく環境とも調和のとれた都市のために先進国はプランを競いあって、それでそういう所へ移住したり人を集めるような空間活用などを考えないとやはり厳しいですね。ものの流れが集中してしまえば問題は大きくなりますので、ある程度バランスがとれて適正になればその危険は少なくとも避けられると思うのですが、これをやるとなると、やはり抵抗も大きい、と思いますね……。

吉良 まあ、その人達をどのように食わせるか、ということが大問題ですからね。

農業というわけにはいかないし、そうすると第二次、第三次産業で食わせなければならぬ。ついこの間も、ブラジルの友人がやってきまして、知恵を貸してくれ、というんです。何かと言うと、アマゾンに鉄鉱がたくさん見つかった、これから十二カ所の鉄の鉱山を作るという。もう、すでに二つが稼働寸前まで来ている。そして、

的に必要なのかな、とも思うのですがその辺はどのように考えればよいですか。

たとえばドイツのように、森は日本に較べて少なく、非常に森を愛して経営している。逆に日本では手の入らないような森が多くあるにもかかわらず、森を愛するということが少し弱い、ということがあるんですが、この状態で森をおいておくのは必要だとは思いますが、その辺はどう考えればよいですか。開発しているんなものに使っていった方がそれは便利かもしれませんが……。

吉良 森林を利用はしても、森林は森林のまままでおいておくことが必要だという点に関しては、大体、異論がないと思うのですね。

それはどうしても必要なことで、地球全体として、少なくとも今くらいの森林面積は減らさないようにして、いわば自然林としておいておく。ただ、自然林といって、利用せざるを得ないでしょうね。

その全部を何もしないで原生林保護区にしておく、ということではできませんね。いわゆるサステイナブルに、すなわち自然の構造は本来のままに保っておいて、そこ

精練のエネルギー源はすべて木炭でやる、というのです。まわりの森林を順番に切って炭を焼いて回転させていくと、何十年か経てば、また森林が復活して、炭を焼けるようになっていくはずだ。それでやっていくことはもう決まっている。しかし、誰もそんな経験のある人がいないし、何年経ったら、炭に焼けるような森林が復活するのかもわからない。だから知恵を貸せ、というのですが、そんなことに知恵の貸しようがないんですよ(笑い)。今の開発途上国はそういう状態ですからね。大変なことですよ。とにかくブラジルだけで毎年、ちよつとした東南アジアの国一つ分くらいの人口は増えますからね。

森本 ブラジルなんかの場合は、インディオの問題が複雑に絡んでいて、その人たちは人間のいわゆる「生物としての人間」的な生活をして、原始狩猟社会のような生活をしているんですが、アメリカにおける白人とインディアンとの争いのように、そうした人達のことをほとんど考慮されずに進んでしまうという事実を考えた時に、開発ということは確かに生活水準を上げるのですが、そればかりではなくて自然のままの状態というのも絶対

から過度にならないように林産物を収穫する、という利用の仕方はせざるを得ないだろうと思います。ただし、それが本当に実行できるかどうかは別問題です。

森本 ナショナル・トラストというのがあって、これは自然には手をつけない、というものです。

吉良 必ずしもそうでもなくて、たとえば人間が適当に管理することによってできている牧場みたいな自然も価値があるからそのまま残して置こうという場合も、トラストの対象にはなっています。したがって、そういうところは、昔からそこで羊の放牧をしているおじいさんなどにちゃんと謝礼を払って、その代わり普通放牧をしてもらう、というようなところもあるみたいですよ。日本も、そういうふう人間が手を加えることによって維持されているような二次的な自然でも、ねうちのあるものは残しておきたい、田園風景のようなものも残しておきたい、ということになってくるでしょう。

森本 かつて、「セイタカアワダチソウを弁護する」という論文を読ませていただきましたが……。

吉良 まず、花粉症の原因だというのは冤罪であると

いうことが一つ、それから、空き地で放っておけば、煉瓦や瓦のかからでがらしているだけの空き地を、人間が何とかするまでの間、とにかく、緑ときれいな花でうずめてくれるのがなぜ悪いのか、そういう感じですね。

森本 それはやはり何でも雑草は悪いという考え方が問題ですね。つまり、雑草はまず自然の中に多様にある生物として生きてきて、自然を作り上げていく重要な役割を担っている、というようには見ないために、雑草を薬剤で全部殺してしまい、それに止まらず、他の土壌生物まで殺してしまうことになる。

吉良 今の日本人はそういう意味では、手がつけれないくらい農耕民族ですよ。水田民族という方もいますが、それほど雑草が嫌いなんですね。耕地の雑草の場合、人間の植えた作物があつて、その中に入ってくるものですから、雑草を取るの当然なんです。自然に生えているものも全部雑草扱いになるんですね。たとえば、川原に背が高く草がはえているのもいやなんです。あんなに草を生やしておいていいのか、と今は行政に対して苦情を言う。昔はみんなで刈ったわけですが。考えて

やはり、そういう環境が残されていないとすると、人間として優秀な人間にはなるのでしょうか、思いやりなどの人間としての徳とか心の豊かさとかいうか、そういうったものが欠けていくように思うのですがね。

吉良 先ほども言いましたように、この時代に大人になつていく世代は、かなりやっかいなことになるかも知れません。だけど、人間なんてのは容易に変わるものではない、というのも事実ですね。日本人の持っている日本人的な特徴というものが、今の世代や次の世代の間になくなつてしまふ、とは私は思わない。やはり、それは保存されていくでしょう。だから、一世代や二世代くらいは、今の我々からみれば、何たる連中だ、と思うような時期があるかもしれませんが、それはいつまでも続かないし、ある程度は修正されていくであろう、せざるを得ないであろう。だが、かなりひどいことにはなると思いますよ。

森本 幼児期にどういう人間になろうとかどういふものを求めようかとかという模範や理想、希望がなくて、ただ一生懸命勉強することが尊いとかお金持ちになるの

みれば不思議な話だ、と思うんです。何の実害もないのですから。刈らないと子供がマムシにかまれるようなことも昔はあったのですが、そんな必要がなくなつても、人間が植えたものでない植物がはびこっているのが気に入らない、というわけですね。日本人はドイツ人のように、

森の中のウォーキングを楽しむということはほとんどないでしょう。そういう意味では手がつけれないくらい農耕民族なのです。昔はそんなことはなかったと思うのですがね、山に住んでいる人は随分いたんですから。何か農耕民が山岳人をすっかり征服してしまった、という感じですね。

森本 我が家にもうすぐ四歳になる子供がいて、絵本をよく読んでやるのですが、おじいさんは山に芝刈りに行き、おばあさんは川へ洗濯をしに行った、このような話が現実とはかなり異質な世界の話になりつつある。子供の育ってくるなかでの環境の話というのは非常に多いのですが、たとえば擬人化して兎に人格を与えたり狸に人格を与えたりするのですが、自然との触れ合いの話が大分あると思いますが、そういう意味から考えますと、

が尊いとか、という価値観だけで育っていくから、結局、企業戦士になつて日本でだめなら外国に行つて、というようなことになるのではないのでしょうか。

吉良 そうなればまだしもですが、そうはならないと私は思いますよ。会社人間、企業戦士的な人間が、減りはしても、なくなることはないと思いますが、むしろ、そういうことより、さつきおっしゃった思いやりとか対人関係といったところで、思いがけないことが起こるのではないかと予想しているわけです。

ちよつとした家庭生活とか、新しく結婚した二人がなかなかうまく夫婦になれないとか、そういったところで欠陥が出てくるのではないですか。今、中国では子供は一人でしょう。今の夫婦は大体収入の半分をその一人の子供のために使っているそうです。そして、子供のことを小皇帝という。つまり、何でも言うことを聞いてやるわけですね。年配の人たちは、あの子供たちの世代になつたらどうなるかと心配だといっています。両親もいろいろ気を使つていて、この週末は父方のおじいさん、おばあさんのところへいったら、次の週末は母方のおじい

さん、おばあさんのところへ行く。で、いつでもその中心に小皇帝がいるのです。そのようにして育った子供は対等な対人関係のぎくしゃくした人間になり、うまく人と協調して何かをやっていけなくなるのではないのでしょうか。日本の今の子供も多分にそれに共通したところがありますね。

私の知っている範囲でも、若い新婚の夫婦がどちらもそんなに特別な人間ではないのに、うまく折り合えないという例があるんですね。ちょっとした小さなことで、折り合えない。そういうレベルでいろんなことが起きてくるのではないかと思います。

森本 たえば戦争なんかも人格の破壊から起こるわけですが、環境のことをやっていて、もし戦争のような緊張状態がやってくるとこれはものすごい大きな問題ですね。もし戦争がなくなってくると、これは環境問題にお金を使えることになりますから、大歓迎である。そこからいえば、戦争と環境というのは大きな関連性があるということになりますね。それは一人の人間の思い描く世界というものがみんな大きくなって地球を変える、

ていきそうな気がします。これからは先進国が生き延びていくために後進国を叩くというパターンも、非常にあり得ると思いますね。

森本 それは難民の問題で私は感じたのです。ポーランド・ビールの例では、日本が島国で浮かんでいる、食べ物もある、いろんなものがある、そこへ困った人がきた時、日本自体が沈んでしまうから乗るな、と言ってすべて振り落とし、蹴落とす、というような行為をしているように見えるのですがね。ある意味ではやむを得ないのでしょうか、それとも受け入れていくようにすべきか、どうなのでしょう。

吉良 とにかく受け入れざるを得なくなるでしょう。蹴落とせるものとはちがいますからね。ただ日本は政府が無策で、そういうときにきちんと受け入れるルールが作れない。よその国の政府はもっと上手ですね。

その国に住み着く人もいるでしょうが、適当に出ていくシステムを上手に作っている。それを作らないとやはり無理ですよ。一般の人が反発するのは無理もないと思いますよ。生活習慣も何もかも全然違うから腹も立つし、

こういうことが鍵になっていくと思うのですが、技術が先にあるのではなくて、どういう世界を作ろうとするかということが大切であると思うのですが……。

吉良 そうですね。地球環境の問題は本当に厳しくてね、今はまだ半分半信半疑のところがありますが、予想されるような事態が本場に現れてきたら、これはものすごい摩擦のたねとなるでしょう。もう一度、戦争を起こすくらいの摩擦になるでしょう。世界全体が協調してみんな仲よく辛抱しましょう、ということにはなかなかならないでしょう。

森本 環境問題の場合は結果の出たときには、もう手遅れであるというようなことが多いのですね。ですから、事前に言うことは聞いてもらえない、結果が出て初めて気がつくという、いつも後追ひであるとすれば、人間の愚かさがあるに環境問題として、戦争もそうですが、見せつけられるような思いがします。

吉良 戦争の可能性というのはなくなっていないわけですが、これまでのように、先進国の間に大きな勢力が二つとか三つとかあつて起こす戦争のパターンではなくなつ

日本人と全く考え方が違いますからね。向こうの行動基準で行動されたら、日本の人はもうかんかんになりますよ。

森本 華僑の人たちなんかはたくましいといいますがね。

吉良 やってくる人たちは必死ですから、必然的にたくましくなる。だから、善意だけにたよつてものをやろうとしても無理でしょう。ちゃんと受け入れるムード作りのようなものを政府がきちんとやるという前提があつて、はじめて受け入れられるのですね。

エコロジーに対する東西の価値観

森本 環境問題の裏にある個人の人間の行動という価値観ということが大事であると思うのですが、思いやりがないとどんな環境は破壊されていくことになるでしょうし、他人に対する思いやりがないと戦争が起こるでしょうし、やはり共存をはかっていく価値観が教育の中にどのように植えつけられていくか、ということが大きいと思うのですが、仏教的な観点から言いますと、全

てのものが因果という縁起でつながっていて、どの存在も尊厳性をそれぞれ持っている、いわゆる生態学的な観点にうんと近い、と思うのですが、たとえば、ニユーサイエンスと東洋思想、という形で現れるように、ものから見るのではなく、一人の内面と物質、宇宙とが繋っていくような調和という関係性を求める価値観や方向性が出てきているように思うのです。で、環境問題を論じていく時に仏法にいう「依正不二」という観点がありまして、先生が最初に言われたような、主体と環境とは一体で動いている、という観点が折り込まれていて、全てのものが関連している、それは一人の人間（正報）の行動によって環境（依報）が作られていく、ということなのですが、これからもう一度このような考え方が必要になってくるように思うのですけれども……。

吉良 それはよくわかるのですが、その時にたとえば欧米でもいろんな言葉を使っている。エコライトというのは、生物それぞれが尊厳性を持っているという考え方で、医学用の実験動物に反対するとか、そうとう過激なことをやっている人たちがいる。一方我々は、エコロジ

世界を覆っている。片や、調和を訴えている東洋が自然と共存してこれまでやってきた。しかし、西洋の考え方でやってきた日本はたしかに経済や技術では発展して先進国にはなった。ですがここに来て、その行き過ぎが反省されてきて、もう一度、生態的な調和を取り戻そうという考え方が蘇ってきた。もともこの考え方は仏法の中にもともとあるために、もう一度仏教思想が脚光を浴びているかと思いますが、自然と人間の関係においてこれから必要な価値観というのは科学技術信仰というよりは共存、調和、先生の言葉でいえば自然との「妥協」の思想であるように思うのです。

吉良 我々はあっさりそう結論してしまいそうですが、我々の考え方の一方の源流は明らかに西洋にあるわけで、そちらの人達はその結論をそう素直に受け入れるのかな、という気がするわけです。たとえば、彼らに較べて我々の方がよりエコロジカルじゃないか、と私などはひそかに思っているわけです。向こうの人達は実験動物に反対で、医学の研究所に入って、実験動物を逃がしたりしている。しかし、我々はそういうことはしない。

カルにものを見ている他に、もともと子供の頃から仏教思想に影響を受けているということがある。また、そのもう一つ前に、もっとひろいアニミズムが日本人にはある。もちろん我々は自然科学者なんですけれども、もともたもっているアニミズムや仏教思想に影響されたような自然観と、生態学の考え方とが交わっているところがあるように思います。今、欧米の人たちが、環境倫理とかバイオライトとかエコライトとか言って、いろいろやっています。それに対して、我々が考えているエコロジには東洋的な思想の色が付いているとすれば、この東西双方の流れを突き合わせるとどういうことになるのか。不勉強で、ヨーロッパ的な新しい哲学をまともに書いた本を読んだことがないのでよく分からないのですが、一度誰かがどこかできちんと対決させてほしいですね。相違うと思うのですが……。

森本 やはり、近代科学が生まれてきた背景には合理主義があり、そのまた背景にはキリスト教やアリストテレスの哲学があって、そういう流れの中で、近代科学が自然を征服してくる、それが世界の大きな流れとなって

我々の論理としては、彼らが、そのようなことをしながら毎日ハムを食べていいのか、とすぐそう思うわけですね。

我々の方では、動物と植物の区別すらなく、すべての山川草木に同じように霊があると思っているわけです。だから、動物と植物とを区別する理由を持たないし、人間への近さという点から動物を序列化する必要も全くないわけですよ。では、生き物を一切食わないかというところではなくて、人間が生きていくためには、そういうものを食べざるを得ないというエコロジの法則はちゃんと認めています。それで動物を殺すときは、手を合わせて念仏を唱えるくらいですむ。また、年に一度は医用動物の慰霊祭をやって割り切る。向こうではそういうことはしない。全部の人がそうだというわけではありませんが、実験動物に反対していけば、そのうち肉食は止めざるをえないところまでいくことは必然のように思えます。これは双方で相当違うのです。一緒にはならない。ひよっとすると、これから将来の環境を考えていこうとするならば、この両者のへだたりや違いが具体

的な行動にも影響してくるかもしれない。ですから、どなたかに一度、思想的に違いがあるのかなのか、あるとすればどこにあるのか、きちんと分析していただきたいと思いますね。

森本　そうですね。今、先生の指摘された事柄について私も、微力ながら努力してまいりたいと思います。本日はお忙しいところ、長時間にわたってありがとうございます。

(きら たつお・滋賀県琵琶湖研究所長・大阪市立大学名誉教授)
(もりもと けんいち・信州豊南女子短期大学教授)